

熊楠works

2015年4月1日

No. 45

題字は熊楠自筆

■発行／南方熊楠顕彰会 〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地 TEL0739-26-9909 FAX0739-26-9913
http://www.minakata.org/ 〈E-mail〉 minakata@mb.aikis.or.jp

自筆資料に見る南方熊楠…………… 16

南方熊楠がハンガリーの民話で見たもの

文／サライ・ペーテル（大阪大学大学院博士後期課程）

南方は古今東西の文献に親しんだ人物として有名である。それを聞くと、ハンガリー人である筆者にはやはり、「彼は母国のハンガリーについて何を読んでいたのであろうか」というささやかな疑問がわいてくる。

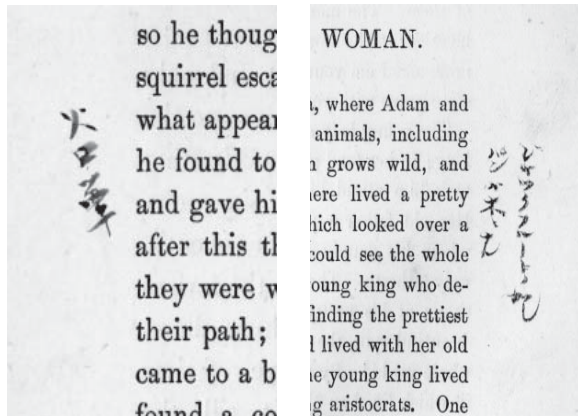
南方が論文執筆の際に参考にした書物で、ハンガリーに関するものは主に二つある。一つは南方が愛読した A. De Gubernatis の *Zoological Mythology* (1872) である。ここからは、例えば、『十二支考』の中の「犬に関する民俗と伝説」で、「ハンガリー人も、黒犬に斑犬を魔形とし、白犬は吉祥で発狂せぬと、信ずる」（南方熊楠全集、第1巻、504頁）と引用されている。原本では、Gubernatis は情報をどこから取ったかしている。しかし、確かに、ハンガリーでは赤は血と火、黒は死、魔女、悪魔と結びついている色である。「赤い犬、赤い馬、赤い人は良くない」（*Vörös kutya, vörös ló, vörös ember egy se jó.*）というハンガリー語の諺にも Gubernatis が言う赤い犬が出てくる。

南方が所有していたもう一冊のハンガリーを扱っている本は、W. Henry Jones, Lewis L. Kropf 英訳・編の *Folk-tales of the Magyars* (1889) である。本書は大きく3つの部分から構成されている。第一部の63ページにもわたる序論では、ハンガリーに住んでいる諸民族の起源から、民間治療、年中行事、動植物に関する俗信、民話に登場する超自然的存在についての説明やテーブルマナーなど、実に多岐に渡って紹介されている。これに続く第二部には53におよぶハンガリー民話が収められており、その翻訳も非常に忠実になされている。その理由は、本書は最初から比較説話学者を対象としているからである。第三部ではラップランドとフィンランドの民話と、第二部で扱われたハンガリー民話の比較が、120ページにわたり展開されている。ハンガリーの民話と信仰について、南方は本書からかなり詳細に知ることができたであろうと考えられる。

南方が所持していた本書の書き込みを見ると、第二部以降に45箇所の書き込みが見られる。これらの書き込みの種類は、主に三つに分けられる。最も多く見られる書き込みは、南方が付けた、本文の内容の見出しである。二つ目は一箇所のみではあるが、英語の単語を本文から写した箇所が見られる。三つ目は内容に関する、南方のメモである。今回は見出しとメモから、一つずつ紹介したいと思う。

まず、本書で見られる最初の書き込みである見出し、40ページに書き込まれている「火口ホウチダク」について紹介したい。この書き込みが見られる民話の中には、未っ子の王子が三つの矢を放つエピソードがある。未っ子の王子は、まず、カラスに矢を放ち、はずしてしまう。しかし、そのくちばしから鋼が落ち、王子はそれを手に入れる。彼は次に鷹に矢を放つが、またもはずしてしまう。しかし、鷹が座っていた石から火打石が砕け落ち、それを手に入れる。三度目は栗鼠を撃ち損ね、矢は大きなキノコにあたり、その一部が砕け落ちた。実はそれは火口ほくちであったという。未っ子は矢を三本も無駄にしたことで兄にひどく怒られるが、夜になると、未っ子が合った三つの道具を使って火を焚くことができ、兄弟は仲直りしたという。

この話において、南方の書き込みから推測できることは、南方が火口ホウチダクに使われたキノコの欠片に注目していたであろうことである。彼は、おそらく、話に出てくるキノコは、実在するもののいずれかであると考えていたようだ。実は、英訳ではこのキノコは火口“tinder”であったとしか書かれ



ていない。この“tinder”という言葉は「火のつきやすいもの」の意味しかない。しかし、ハンガリー語の原文で使われている“topló”という言葉はツリカネ草ツリカネ草(*Fomes fomentarius*)を指している。このキノコはハンガリーに限らず、欧米では長い間、実際に火打ち道具として使われていたのである。つまり、南方が察したように、実在するものである。

紹介する書き込みの二つ目は、163ページにある「パンカ木ニナル ジャックフルートノ如シ」というものである。この書き込みが見られる民話においては、アジアのどこかにある楽園に住んだ美少女が主人公である。彼女が住んでいたところでは、パンさえもが木に実っていたという。「木に実るパン」というのは、ハンガリー民話でしばしば耳にする決まり文句で、「働かずして食べ物が手に入る楽園」を表すものとして使われる。しかし、南方はここでいう「木に実るパン」についても、前例のキノコ同様、実在する木、すなわち、ブレードフルーツ(*Artocarpus altilis*)の仲間であるジャックフルーツ (*Artocarpus heterophyllus*)を指しているのではないかと考えていたであろうことが書き込みから推測できる。

以上の二つの書き込みからも分かるように、南方は、民話にあらわれるモチーフの一部は、実在する事物に由来するものであると考えていたようである。今回は紹介できなかったが、「火口吹ク龍」や「五角ノ黒イ卵」をはじめ、南方は本書で数多くの興味深い書き込みを残している。

CONTENTS

第25回南方熊楠賞 受賞者決まる	…2
第28回 熊楠をもっと知ろう！講演会 土永知子	…3
第28回 熊楠をもっと知ろう！講演会 多田裕子	…8
第28回 熊楠をもっと知ろう！講演会 田村義也	…13
南方熊楠研究会夏季例会研究発表 大倉茂	…20
南方熊楠研究会夏季例会研究発表 大木えりか	…24
南方熊楠研究会夏季例会研究発表 濱田洋一	…30
「熊楠」生物覚え書⑳ 土永知子	…35
南方熊楠蔵書『金魚養玩草』と植物学者伊藤篤太郎について 郷間秀夫	…37
書簡の杜（十二） 岸本昌也	…38
海辺のクマグス 番外編 安田忠典	…40
熊楠メモランダム《9》 石丸耕一	…42
坂の上の雲ミュージアム「子規・真之の青春」展を訪ねて 松居竜五	…43
南方熊楠の英文論考をどう位置づけるか 志村真幸	…44
南方熊楠と同級生たち 田村義也	…46
孫文記念館開館30周年記念式典に参加して 濱岸宏一	…47
南方熊楠研究会年次例会開催について	…49
追悼・小泉博一先生	…50
平成27年度開館カレンダー	…51